



横須賀商工会議所

6次産業化を応援!



生産者の一番の喜びである収穫。非農家の秋元さんにとって広大な畑は初めての経験

非農家たちの挑戦

〜就農へのハードルを糧に〜

農業従事者の数が全国的に減り続けている。担い手不足は深刻の度合いを増しており、若い世代の参入促進は喫緊の課題だ。新時代の農業人の育成を旗印に横須賀商工会議所のリーダーシップが進められている「産農人」プロジェクトには、現在メンバー6人が在籍。その内、農家の出身ではない非農家が半数以上を占める。彼らは農業にどんな夢や希望を抱いているのか。

「産農人」では、三浦初声高等学校農業科の生徒らが、地元の若手農家や飲食店経営者などに教えを乞い、深い学びを得ている。生産技術の習得だけでなく市場分析、加工商品の開発など、マーケットセンスを身に付けることが要。プロのノウハウを吸収できる実践型

研修となっている。

「高校生フアーマー」として自宅の畑を切り盛りしている齊藤輝さん(3年)と家族がイチゴ農園を営んでいる長島未歩さん(2年) 以外は、高校に入学するまで農業の経験はほぼゼロ。荻津伊吹さん(3年)は中学時代に職場体験で訪れたみかん農園で「自然の中に身を置く心地よさに目覚め、農業に興味を持つようになった」。秋元琉椰さん(2年)とシユトコウチニヨケンジさん(2年)は、「小さい頃から植物や生物が好き。自然と触れる仕事がい」と進学先を農業高校に決めた。「将来は食品加工や開発の仕事に携わりたい」との夢を持つ藤藍音さん(2年)は、「野菜の特性や旬を理解することがプラスになる」と別の角度から農業

を捉える。どのメンバーも職業としての農業に高い興味を抱いている。

農業のリアルに触れる

非農家の新規参入にはそれなりのハードルがある。農地を取得するには農家の元で1〜2年経験した後、営農計画を立てるなどして市町村から「認定農業者」として認めてもらわなければならない。近年は農業法人に就農するという選択肢も広がっており、独立のための準備期間に位置付ける人もいるという。

「産農人」は、非農家の彼らが自分の将来選択を早い段階から意識できる機会。6次産業化に挑む身近な大人たちが最高の手本となっている。「可能性としての未来と厳しい現実。農業のリアルに触れる場」と話す荻津さんの言葉が印象的だ。

農業をもっと知りたい

荻津伊吹さん

自然とともに生きる「農業」という仕事に漠然とした憧れを抱いていた。中学校の職場体験で訪れた津久井のミカン農園。心地よい風に吹かれながらの収穫作業は想像以上の満足感。将来の道筋が見えた気がした。農業高校で学び、「産農人」では現場を経験。畑での作業や食品加工に楽しさを感じるようになった反面、非農家の新規就農のハードルの高さや農業経営の難しさも知った。卒業後は三浦市農協に就職する。いろいろな農家を見ることで、自身のスタンスを固めるつもりだ。



「産農人」での学びを活かすと荻津さん

対面販売——生産者と消費者の情報交換



トラック3台分の野菜はほぼ完売

マーケティングの第一歩は、消費者ニーズを的確に掴むこと。商品への興味や関心、価格に対する反応は対面販売を行うことでさまざまな情報が得られる。追浜エリアの人気イベント「ナイトバザール」で横須賀の農家が手掛けた産直野菜の販売があり、産農人のメンバーも売り子として協力した。

「フルーツがぶー甘い! 生でも美味!!」「よこすかキャベツどっしりキュっ!!」などの手書きポップを張り出し、声を枯らして来場者に購入を呼び掛けた。「接客販売には、生産とは異なる楽しさと難しさがある。商品の魅力を伝え、美味しい食べ方を含めた提案が必要」と長島未歩さんは感想を話した。